女性Ｐと関裕美ちゃんがオーディションで負けて立ち直るお話

美怜

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アイドルマスターシンデレラガールズに登場するアイドル「関裕美」ちゃんと、彼女の担当Ｐであるオリ女性Ｐがレベルの高すぎるオーディションに参加して敗北し、その後立ち直るだけのお話です。

毎日更新で全三話、合計５０００字以内の予定。

Ｔｗｉｔｔｅｒから受信した電波の導きに従って書きました。

目次

第一話 1
第二話 5
第三話 10

第一話

都内にあるとあるスタジオ、その一室で、多くの少女とその担当プロデューサー達が緊張の面持ちで目の前に座っている審査員の言葉を待っていた。

今勢いのあるアイドルを紹介するＴＶ番組「発掘！アイドル大辞典」への出演をかけたオーディション、その合格者発表の瞬間が近づいているのである。

「お待たせしました。合格者の発表です」

今勢いのある、という言葉の通り、番組に出演できるのはその時々で巷の話題の中心となっているＡ～Ｂランクのアイドルばかり。本来ならＣランクに上がりたてのアイドル（私たち）が参加するなんてもっての他なオーディション。

普段の私ならば、Ｃランクに上がって最初のオーディションにこの番組を選ぶという同僚を見たら、一笑に付した後でやめておけというレベル。

そんな無茶を、私は今担当アイドルにさせてしまっている。

なぜエントリーしてしまったのか、という言い訳ならいくらでも思いつく。
先日ランクが上がり、敏腕記者として名高い善永さんの取材を受けたばかりで裕美の話題性が上がっていること、その影響か、非常に厳しいといわれているこのオーディションの書類選考を通過したこと。
他にも、最近様々なところで会うことが多いライバルプロダクション所属のアイドルから彼女も参加すると聞いたことや、今回のオーディションではデビューから間もない新人アイドルを紹介する予定であるという情報を事前に耳に挟んだこと……

「本日のオーディション合格者は……」

しかし、そんなものはどれも言い訳に過ぎない。
直近のオーディションに連続で合格でき、取材を受け、一次審査も通過出来て。どこかに驕りがあった。
はっきり言って調子に乗ってしまっていたのだ。
最近の裕美は勢いづいていたし、この番組に出演できれば一気に有名にしてあげることができる、などと思っていた今朝までの自分を怒鳴りつけたい。

「……番の方です。おめでとうございます」

結果は当然不合格。

蓋を開けてみれば、オーディションに参加していたのはいつも通りAやBランクのアイドルばかりで、ほとんどBに足を踏み入れているCランクアイドルである例の彼女が私たち以外で唯一のCランク参加者であった。

いくら最近調子が出ているといっても、そんなメンバーの中に入れられていつもの実力が発揮できるわけがなく、そもそもこのメンバーの中でいつもの力を出しきったところで勝てるわけもない非常にレベルの高いオーディションだった。

しかし、悪いのは裕美ではない。

審査員が興味を失っても歌い続ける裕美の姿を、私の言葉を信じて精一杯笑顔を作っている裕美を、私は最後まで見てあげることができなかった。

こんなオーディションに参加させてしまったことへの後悔と罪悪感とで、顔を上げていられなかったのだ。

「呼ばれなかった方はお帰り頂いて結構です。おつかれさまでした」

プロデューサーの仕事とは、自らの担当するアイドルを光り輝かせることであり、一人一人の実力に合った舞台を用意してあげること。

そんなプロデューサーである私が、自らのミスであの子に辛い思いをさせてしまった。

……肩を落としてこちらに戻ってくるだろう彼女を、どんな顔をして迎えればいいのだろうか。

――――次々と押し寄せる後悔と自責の念により、私は目の前が真っ暗になっていくのを感じた――――

第二話

「勝負は実力と運で決まるの。今の時点でこのオーディションの一次審査を通れたあなたなら、そのどちらも十分だって信じてるわ」

そういって、プロデューサーさんは私の頭を撫でてきた。

頭、といっても私が髪の毛が乱れるのが苦手なことを知っているプロデューサーさんは、いつも頭の上ではなくおでこを撫でてくる。

子供扱いされているみたいで、正直どうなんだろうと思うこともあるけれど、こうしてプロデューサーさんと触れ合うのは……嫌いじゃない。

「でも、この番組っていつも今の私よりも高いランクの人たちが出てる気がするんだけど……」

「大丈夫よ。今の裕美には勢いがあるの。このチャンスを無駄にするなんてもったいないわ」

そういうプロデューサーさんは、なんだかいつもよりも少し押しが強い気がしたけれど、その言葉からは私に対する信頼が伝わってきたので、その時の私は期待に応えなけ

れば、と思った。

「全員、集まりましたか？　では、今日の参加者の確認を行います」

頑張ろう、と気合を入れて会場に向かってみれば、そこに集まっていたのはやっぱり私よりもランクの高いアイドルばかりだった。

テレビで見たことのある人から、雑誌の表紙を飾っている人まで……唯一見つけられた同じランクのあの子は、そんな中でもいつもの彼女のままで、それを見て私も全力を出そうと思った。

集まっているアイドルの中にこの間共演したアイドルの子がいたので、挨拶をした方がいいのか迷った私はプロデューサーさんに聞いてみることにする。

「プロデューサーさん」

……返事がない。聞こえていないのだろうか？

そう思いもう一度声をかけなおすと、少し焦った感じでプロデューサーが言葉を返してきた。

「どうしたの、裕美？」

「あそこにいるの、伊吹さん……だよね？　この前共演させてもらった」

「え、ええ。彼女も参加していたのね。オーディション開始まで少しあるから、挨拶でも

いってきたら?」
「さっき全員の名前が呼ばれてたのに……ぼーっとしてたの?大丈夫?」
どこか悪いのかと心配になって質問してみたけど、どうやら問題はないらしい。
改めて、行っておいでとプロデューサーさんから声をかけられたので、私は彼女へ挨拶に向かうことにした。

しばらくして、オーディションが始まる時が来た。
「そういえば、今日は芸能記者さんが、取材にみえているそうですよ」
「チャンスにするか、それとも、ピンチにするかは、あなた達次第ですよ」
そういった審査員さんの言葉に目を向けると、そこにはこの前私を取材してくれた善永さんがいた。
これは一層頑張ろう、と思っていたら、審査員さんから突然声がかかった。
「では8番さん、皆の代表として、意気込みなんかを話していただけますか?」
(何を言えばいいのかな……)
急に振られて真っ白になった頭に、いつもプロデューサーさんに言われている言葉が浮かんだ。
「笑顔で楽しもうと思います」

そういった顔が笑えていたかは分からないけれど……

「大変良いお答えですね。今日のオーディション、期待していますよ」

私らしい答えはできたかな、と思う。

そして回ってきた私の出番。正直言って実力不足を感じるしかなかった。

3人いる審査員さんの内、最後までしっかり見ていてくれたのはひとりだけ。

……やっぱり私なんかが勝てるオーディションじゃないのかな。

そう考えていたけれど、私ならきっとできる、と言ってプロデューサーさんが連れてきてくれた今回のオーディションを無駄にしたくなくて、私は少しでも次につなげるために他の人の演技をしっかりとみてみることにした。

しばらく見て分かったことがある。

（……ああ、これは勝てないな）

私と他の子たちの演技は、〝何か〟が違う。

何が違うのかは人によって違う。でも、絶対に何かが違うのだ。

例えば、今の子はダンスがとってもうまい。その前の子の歌は引き込まれるような声だったし、そのどちらもできる子もいた。

たぶん、今の私にはあの子たちのようなアピールポイントが足りないのだと思う。

そうやってこの先何をするべきかを考えているうちに、結果発表の時間になった。

「お待たせしました。合格者の発表です」
「本日のオーディション合格者は……」
「……番の方です。おめでとうございます」

結果は当然不合格。
やっぱり負けちゃったのは悔しいけど、その分次に必要なことが見えてきた気がする。
……私だけの、アピールポイント。
オーディションも終わったし、とりあえずプロデューサーさんと合流して今の気持ちと考えを伝えてみよう。
そして、今日ここへ連れてきたことに対してお礼を言おう。
そう考えて、私は待っていてくれているプロデューサーさんの所へ向かうことにした。

第三話

オーディションの結果に打ちひしがれ、項垂れている私のもとに裕美が帰ってきた。
相変わらず顔を見ることもできないまま、何を言えば――或いは、私なんかがこの子に対して何を言っても――いいのだろうか、と考えていると、裕美の方から声がかけられた。
「ありがとうね、プロデューサー。このオーディションに連れてきてくれて」
一瞬何を言われたのか分からなかった私が言葉に詰まっている間に、裕美はさらに言葉を続ける。
「オーディションには受からなかったけど、おかげで今の私にはいろんなものが足りてないってことがわかったの」
「今日は、私にそれを教えるために連れてきてくれたんだよね？」
私のことを信頼してくれている目の前の少女の眩しさに、思わず顔を上げてしまう。
やっとこっちを見てくれた、と言って嬉しそうに微笑む彼女に、遂に私は我慢できなくなってすべてを打ち明けた。

最近の勢いに慢心していたことや、初めから今の裕美には厳しいオーディションだとわかっていたこと。それなのに自分を信じて必死に演技を行ってくれた裕美に対して、とても申し訳なく思っていること。

担当アイドルのことを考えることもできない私は、プロデューサー失格である、という悩み。

私の告白を無言で聞いていた裕美は、私が全てを吐き出し終わっても暫く黙ったままであった。

――ああ、この子を悲しませてしまった。

そう思った私が、許してもらえるまで何度でも謝り続けよう、と決心をしたその時。

「……ふふ、そんなことで悩んでたの？」

裕美は可笑しくてたまらない、というように笑い出した。

「あのね、プロデューサー。そもそも私が今アイドルをやってるのは、あの日ポスターを見ていただけのあたしをプロデューサーがこの世界に引き入れてくれたからなんだよ？」

「それに、今のランクまで来られたのも、あの日くじけそうだった私にプロデューサーが気づいて、また始めようって言ってくれたから」

「普通にしてても怖いって言われる私が、アイドルなんて……。表現するお仕事なんて、

できるわけがないと思ってた」
「でも、プロデューサーのおかげで、私の笑顔が誰かを幸せにできるってわかったから。だから、私は今もアイドルを続けてるの」
「たった一回の失敗で失格なら、私なんてもう何回もアイドルを引退しちゃってるよ」
そういって私を見つめてくる裕美。
裕美の言葉に、私は頭を強く殴られたかのような衝撃を受けた。
本当に目の前にいるこの子は、あの自分に自信を持てていなかった少女と同一人物なのだろうか。
気が付かないうちに成長していた彼女に感動し、私が謝罪と感謝の意を伝えていると記者の善永氏と出会った。

「ああ、７７４プロの。今日はお疲れさまでした」
そんな挨拶から始まった善永氏との雑談で、私たちは思いがけないことを聞いた。
曰く、挨拶から演技まで、正直言ってレベルは足りてなかったけど心意気は良かった。
ランクがあがりたてにしては頑張っていたから、力をつけて是非また挑戦してほしい、と審査員が評していたというのだ。
「私も同じ思いですよ」

そういうと、近いうちにまた取材させてください、という言葉を残して善永氏は去っていった。

善永氏が歩いていくまで頭を下げ続けていた私たちは、ほとんど同じタイミングで頭を上げた。

そして、見つめあうと――嬉しさから、どちらからともなく笑い出した。

その後、すっかり普段通りの空気になった私たちがいつものように雑談に興じていると、裕美がどうしても言いたいことがある、と切り出してきた。

「あのね、悩んでたんだから仕方ないのかもしれないけど、私が頑張っているところを見てくれてなかったのは、少しいや。私も信じるから、プロデューサーも私を信じてほしいの」

至極もっともな意見であり、落ち度は完全にこちらにある。

一体どうすれ許してくれるだろうか、と私は質問した。

「……じゃあ」

しばらく考えて、裕美はこちらに向けて花の咲いたような笑顔でこう言った。

「ねえ、プロデューサーさんのこと、○○さんって呼んでもいい？」

――多くのことを学ぶこととなった今回のオーディション、慢心していたのは決していいことではなく、これからも気を引き締めていかなければならない。

しかし、お陰でこの子がこんなにも頼もしくなっていることに気付けた。

これからも、この子の笑顔をもっと多くの人に見てもらえるように、二人で一緒に成長していきたいと思う。